2024 年　1 月　2 日　提出

2023 年度　高等学院同窓会学術研究奨励金
研究成果報告書概要（WEB 公開用）

高　等　学　院　長
高等学院同窓会理事長　殿

研究代表者氏名［　山下晃平　］

学年・組・番号［　3 年　E 組　26 番］

研 究 課 題：　道徳教育の調査及び学校における評価理論と実践の乖離

（英文）　Investigation of character education：Discrepancy between evaluation theory and practice in school

研 究 概 要 ：

（研究課題を選んだ動機、達成するための計画・目的・方法等について 200～400 字で記入してください）

本研究の目的は、道徳の教科化を評価システムの導入という側面から考察・批判を行うことである。私自身、道徳科の授業を受け、通知表にその評価が書かれるという経験をした。それまでの「道徳の時間」と現行の「道徳科の授業」の両方を受講した世代である。そこで感じた、学校で学び評価される道徳の違和感から、今回のテーマの設定に至った。方法としては、実際に評価制度がどのように機能しているのかを確認するための取材調査と、私が感じた違和感に客観性を持たせるための理論化を目的とした文献調査を採用した。取材調査では、公立小学校の現職教諭へのインタビューを行い、道徳科の問題点への「教える側」の視点獲得を目的とした。文献調査では有識者の知見を借り、言葉の意味及び関係性の再定義を重要視した。これらの作業から、主観的な経験をもとにした仮説に客観性を持たせ、道徳科批判を試みた。

研 究 成 果 ：

（研究の結果概要、結果に対するフィードバックや感想等について 200～400 字で記入してください）

取材調査より、システム的な欠陥から道徳教育における評価は、教師側へのフィードバックとしての意味をなしていないことが分かった。そして、児童（生徒）へのフィードバックとしても、形としてのみ存在しており、その制度に危険性も有効性もないことがわかった。よって、評価制度は教科化の副産物として生まれたものであると理解した。そして文献調査より、道徳観は倫理観に内包され、倫理観を打ち破るものであると定義でき、道徳観の育成が教科化の背景にあった「いじめ問題」への対処として有効であることが分かった。また、「評価」という言葉自体がもつ影響力が、この道徳観育成を阻害するものであることが分かった。この調査結果から、評価の「制度」は実際には効力を持っておらず、その「言葉」を使用することによって教科化本来の目的達成を困難にしていることが明らかになった。今後は、調査において不十分であった、取材対象の拡充と、さらなる客観性の担保を行う。最終的には、授業カリキュラムの作成及び実践を見据えている。

研　究　者：（以下の、代表者・分担者は学年・組・氏名を明記する）

研究代表者　3E　山下晃平

担当教諭　白石大知　（受給額：22000　円）

※研究課題、研究概要、研究成果、研究代表者名が WEB ページ上で公開されることに同意します

（次のページに続きます）

研究成果写真　：

（研究過程がわかる写真や、研究結果がわかる写真などを数点貼り付けてください）

以上